

Title	詩と造型美術：ジョン・ キーツ覚え書
Sub Title	Plastic art and poetry : A study of John Keats
Author	相馬, 倫嘉(Aijima, Michiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1970
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.29, (1970. 5) ,p.166(33)- 179(20)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	美学美術史特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00290001-0179

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

詩 と 造 型 美 術

——ジョン・キーツ覚え書——

相 島 倫 嘉

は じ め に

レッシングに倣って、少し気取った題を付したが、ここでは「ラオコーン」の如く、詩と絵画の表現上の特徴を分析し、それらの限界を論ずるといったことではなく、J・キーツという一英詩人に於ける詩と造芸美術との関わりを考えてみようと思う。キーツが、その詩作に際して、イメージの根拠となった幾多の美術作品を、彼がどういう経路でそれに接するようになり、どのように作中に同化していったかを調べるのが、当初の目的であった。だが、今は教職につく者の苦難の時代、日夜議論に、討論に、時間を費やし、遂にこの原稿し締切り日となり、十分な調査が出来ずにしまった。後日を期することを誓って、美学美術史学研究室の諸先生のお許しをお願いしたい。

(一)

キーツの詩には、感情面がつよく前に出ているものと、読むにつれ、妙にその情景が心に浮ぶもの、即ち視覚面が強調されているものがある。私が後者に注目するようになったのは、キーツの処女出版である 1817 年詩集の巻末にある ‘Sleep and Poetry’ (眠りと詩) という 404 行に及ぶ一篇を、少し詳細に読んでいる折、ふと、プーサンの絵の一場面が心に浮ぶのを感じたためであった。頂度その少し前、八代修次教授の自由課題のレポートに、プーサンを調べて書いたばかりであったので、その印象が一

層つよかったのであろう。当時、キーツの研究書として、一つの古典ともなっていた、詳細かつ膨大な Amy Lowelle のキーツ論や M. Murry, S. Colvin, Evert 等の諸著を参照しても、キーツと絵画との関連を論究した箇所には遭遇しなかった。やがて教師生活に入り、傍、キーツの書簡集の翻訳を、牛歩の如くではあるが続けていると、キーツが美術に寄せる関心が並々ならぬものであることがはっきりしてきた。勿論それまでも、名作といわれ、あの終行の ‘Beauty is truth, truth beauty’ で知られる ‘Ode On A Grecian Urn’ についての論文などでは、キーツがこの詩篇を作るにあたって、材源というか、インスピレーションを受けたというか、ともかくその古甕が、ボルギース家所蔵の花びんであるとか、否、ホランド家所蔵の古甕であるとか、それぞれ写真入りで言及しているものもあった。書簡を通読しただけでも、Haydon (ヘイドン)、Severn (セヴァーン) といった身の画家は勿論、ラファエルロ、ジオット、デューラー、ホルバイン等、多数の美術家の名がみえ、また時には、ラファエルロと、マッケンジーとを、各々の作品の intensity を中心に、鋭く論じた一文などすらられる。Leigh Hunt (ハント) の唱える詩と絵画の Sister-Arts 説に同調しているキーツは、レッシングなどとは、全く別の立場の考えであるのに、諸研究者が殆んどこの点にふれていないのが不思議であった。しかるに、1967年オックスフォード大学出版から、Ian Jack (ジャック) 博士の “Keats and the Mirror of Art” が出版されるに及んで、私の着想が必ずしも的はずれでないことが証明された。ただこの書によって、Sidney Colvin (コルヴィン) の1917年版キーツ論には、この主題に多少ふれていることが分った。(私の所有しているのは、1887年版と1957年版)共に1994年に出た、Jack Bate (ベイト) と、Aileen Ward (ワード) のキーツ論が、今までふれられなかったこの主題に手をそめたのは、恐らく、Jack 博士の “The Realm of Flora in Keats and Poussin” (Times Literary Supplement, 1959, p. 212) に示唆を受けたものと私は考えている。Jack 博士の前述の著書も、三百頁にも及ぶ大論文であるが、これも、自らのこの小論が発展して出来上がったものだという。(同書 preface 参照)

(二)

キーツは 1921 年 9 月 18 日、遠いイタリアに転地療養の旅に出掛けるが、イギリスを出る時には既に、この長旅には、もう到底耐え得ぬ身体であった。翌 22 年 2 月 23 日夜、友人の画家セヴァーンに見守られながら、二十五歳の生命を終えた。詩作に専心したのは、実質的には、1816 年秋から 19 年秋まで、ほぼ三年の短い期間であった。ここに彼の生涯を詳述する暇はないが、九歳のとき、父が不慮の事故で死に、母は再婚したために、彼は他の弟妹たちと共に、母方の祖父母に預けられた。その後この祖父母の死にあい、結局好きな学校 (John Cowden Clarke が Enfield に経営していた私塾) をやめて、エドモントン (Edmonton) の助手となり、外科医の修業をすることになった。何故数ある職業の中で医者を選んだかについて、今日まで多くの批評家たちの論議があるが、結局は収入も比較的良好、社会的にも比較的良好と尊敬されていたという、平凡な理由に落ちつきそうである。比較的良好と書いたのは、私塾もろくに出ないキーツが、後に外科医の免許を得ることからも分るように、外科医は、一定の修業をつめば、大学を出なくともなることが出来た。これに反して、内科医は、外面に出ない部分を扱うということから、高度な知能と技能が必要と考えられていた。外科医が床屋を兼ねた時代もあって、要するに、今日のように医学の発達しない時代の外科医は、患部を切断することが、職務の第一であったために、人間大工のような具合に人々は受けとっていたのだった。

ハモンドのもとでは、自らも気がすすまない修業であったことも手伝って、ともかく憂うつな生活であった。それでも五年間は続けるが、この間に二度は、エンフィールドにある母校の師 C. C. Clarke (クラーク) を訪れ、人生や詩や芸術のことを語るのが、唯一の慰めであった。キーツの処女詩集 (1817 年) を開けば、彼が如何に日常生活に耐えられぬものを感じていたかが容易に分る。当時の修業仲間が、後に語ったところによれば、「キーツは部屋にいるときは、いつも窓辺にいて、ぼんやりと空をみつめていた。」という。Jack 博士は、この状態を評して、“Above all Keats

is seeking a religion which will nourish his imagination.” (Keats and the Mirror of Art p. 117) と述べている。その信仰とは、一般に西洋人を取りまく、キリスト教といった既製のものではなく、私的宗教 (private religion) である。

キーツがキリスト教に抱いていた感情を伺うには、自署はないが、画家セバーンの写しによると、1816 年 12 月 24 日の作とある、“Written in Disgust of Vulgar Superstition” と題されたソネットは、その資料となる。

The church bells toll a melancholy round,
 Calling the people to some other prayers,
 Some other gloominess, more dreadful cares,
More hearkening to the sermon's horrid sound.
Surely the mind of man is closely bound
 In some black spell; seeing that each one tears
 Himself from fireside joys, and Lydian airs,
And converse high of those with glory crow'd.
Still, still they toll, and I should feel a damp,—
 A chill as from a tomb, did I not know
That they are dying like an outburnt lamp;
 That 'tis their sighing, wailing ere they go
 Into oblivion :.....that fresh flowers will grow,
And many glories of immortal stamp.

ある日曜日のこと、教会の鐘が憂うつげに鳴りわたり、そのために、キーツは詩作を中断され、その忌々しい気持が、gloominess とか dreadful cares とか black spell といった言葉を散りばめたソネットになったのである。キーツは熱心なクリスチャンではなかったが、さりとて、真の意味でキリスト教を排けるほどつよい信念をもっていたとは思われない。恐らく、L. ハントなどを中心とした反キリスト教主義 (Anti-Christianism) の影響を多分に受けて作られたものではなかろうか。C. L. Finney (フィニー) は、「英国分離教会派の醜い偏狭さ」(the ugly bigotry of Christian

sects) と「自然や、炉辺の憩や文学の美しさ」(the beauty of of nature, the fireside, literature) を対比させたものだという。A. ワード女史の大作 “John Keats—The Making of A Poet” (1963, Secker & Warburg, London) の中にも、キーツとキリスト教との関連を言及した箇所がある。

.....Keats's rejection of Christianity was rooted deep in his past, however, as appears from an angry sonnet 'In Disgust.....' which he wrote one Sunday morning this winter.....wakening the memory of bells tolling at five funerals within his own family. (下線部筆者)

最後の下線部分の着想は実にすばらしいと思う。考えてみれば、キーツの悲しい生涯は、すべて肉親の「死」と結びついている。父の死が不幸の発端であり、祖父母の死が、彼の心ならぬ医業へと追いやり、また母の死の原因であった結核菌が、弟の死を導き、その弟を誠意看病したキーツの死のもとにもなった。肉親の葬儀のたびに鳴り響いた鐘が、キーツの心に深くしみ込み、その音はいつも彼の気持を暗くさせた。その上に、当時の英国教会は、真の信仰を失い、全く形骸化しており、その教義も全く理性を欠いており、知的な人間は殆んど賛同するものもなかった。キーツが反撥したのは、キリスト教の思想というより、こうした教会の惰落ぶりに対してであったと思う。一般にパガニズムの詩人と考えられているキーツの作にも、キリスト教の影響の十分伺える作品もみられるのだが、それは他の機会に譲り、彼の private religion の方へ照明をあてることにする。この宗教の源を、ミラーの「ギリシャの神々」とか、ヘルダーリン、ノヴァリスといった当時のドイツ詩人達に影響を及ぼしたと同様のものとする見方もある。キーツは、ドイツ語は読めなかったけれども、こういう精神の下に書かれた本の翻訳書を読んだだろうことは十分考えられる。(cf. Aesthetic Paganism in German Literature from Winckelmann to the Death of Goethe, 1964) だが、私はその影響として、やはり、L. ハントとワーズワスを考えている。

(三)

キーツの private religion を Jack 博士は「美の宗教」と名づけた。美の宗教は、想像力を養い、生命の美しさを伝えるものであった。キリスト教が彼にとって「死」の宗教であったのと対照をなしていた。

私は先に、キーツの詩における特徴として、感覚面の各々が強調されている部分があると述べた。大雑把にいて、キーツの「美の宗教」の視覚面は、L. ハントに、感覚面はワーズワースに負っているものだと考える。ハントとキリスト教の関係は、既にふれたように、彼が Anti-Christians の中心人物であったことから明白である。1816 年 11 月 5 日付けのヘイドンの日記には、ハントの事が次の如く記されている。

Leigh Hunt says he prefers infinitely the beauties of Pagan Mythology to the gloomy repentance of the Christians.

ハントは当代の才人で、ジャーナリスト、詩人、批評家——いわばディレッタントと言い換えてもよい人物であった。キーツのキリスト教に対する考えと、ギリシャ神話に対する執心ぶりは、全くそのままハントを受け継いでいると言ってよい。ハントは少年時代に両親が生活に困って、伯父の画家 Benjamin West (ウエスト) の家に寄寓していた。ウエストは、この少年に、閑さえあれば終日でも、芸術に対する自らの考えを語り、自作の解説をしてきかせた。その上に、キーツが 1817 年 12 月に訪れることになる、個人美術館を所有していて、ハントの美術への開眼に大きな役割を与えたことが、「自伝」によって知られる。キーツは、ハントとの親しい交際によって、イタリア・ルネッサンスの諸大家から、レムランツやブーサンや、クロード・ロランの諸作をも知るようになったのである。1817 年詩集の 'Sleep and Poetry' でキーツが

Thus I remember all the pleasant flow
Of words at opening a portfolio.

と書いたとき、彼の脳裡には、美術作品に熱弁をふるうハントの姿があった。キーツが詩作に際して、造型美術から、かくも多くのインスピレーションを受けたのも、実はこのハントの Poetry-Painting の Sister-Arts 説に起因していることは明らかである。ハントは、ギリシャ神話から、スペンサーに到るまで、凡ゆる神話の図解化の重要性を幾度も語っているが、キーツは逆に、神話に材源を求めた詩作をする場合に、ラファエルロ、ティツィアーノ、ロマーノ、レイニ、プーサン、クロード・ロラン、サルヴァトーレ・ローザ、B.ウエスト、ジョン・マーチンといった先人の画家たちの作品の描写を詩に移すといったこともたびたび行なっている。

セヴァンの伝えるところによると (The Life and Letters of Joseph Severn by William Sharp, p. 29 参照), キーツはしきりに「ギリシャ精神」について彼に語り、それを「美の宗教、喜びの宗教」(the Religion of the Beautiful, the Religion of Joy) とよび、それらの「具体的な歓び」(the incarnate Delight) としてのギリシャ彫刻についてセヴァンに教えたという。これらも、やはりハントによる Mythology への開眼のお蔭であり、この神話の与えた想像力が造型美術へと結びつけたのである。例えば、1817 年詩集の巻頭にある、“I stood tip-toe……”において、キーツはキューピッドとサイキの神話について語っているが、これはラファエルロ以来画家たちの好んで扱った題材である。この詩の以下の一節などは、非常に視覚的な部分であり、読んでいて、その場面を vivid に思い浮べることが出来る。

So felt he, who first told, how Psyche went
On the smooth wind to realms of wonderment;
What Psyche felt, and Love, when their full lips
First touch'd (141-4)

更に数行あとの一節も同様の視覚的効果がある。

So did he feel, who pull'd the boughs aside,
That we might look into a forest wide,

To catch a glimpse of Fauns, and Dryades
Coming with softest rustle through the trees ;
And garlands woven of flowers wild, and sweet,
Upheld on ivory wrists, or sporting feet :
Telling us how fair, trembling Syrinx fled
Arcadian Pan, with such a fearful dread.

(144-51)

Jack 博士もこの一節にふれ、この詩の部分の材源となった特定の絵を断定することは不可能であるが、絵から受けたインスピレーションが、文学的な想念と融合したものだと言っている。(前掲書 p. 121)

1816 年、British Institute に、プーサンの「バックスの踊り」が展示されている。これは後に Angerstein Collection に収められることになるのだが、キーツはこの絵を見ていたのかも知れない。次に L. ハントに献じたソネットの一節をみよう。

Glory and Loveliness have pass'd away ;
For if we wander out in early morn,
No wreathed incense do we see upborne
Into the east, to meet the smiling day :
No crowd of nymphs soft voic'd and young, and gay,
In woven baskets bringing ears of corn,
Roses, and pinks, and violets, to adorn
The shrine of Flora in her early May.

プーサンの「フローラの凱旋」とこのソネットを比較してみれば、キーツが、殆んどをプーサンの描写に負うていることが明白である。「フローラの凱旋」にプーサンが頂度ヴェネチア派の「色彩」に魅せられ、殊に現在ブラド美術館に所蔵されているティツィアーノの「バックナル」の影響が大きい。(講談社版世界の美術館 19 参照)

このような例は、Jack 博士の指摘したものだけでも夥しい。私も結果的には、博士の跡追いをすることになってはいるが、次第に資料をととのえて、この方面の調査を続けていきたいと思う。

(四)

キーツの「美の宗教」に、ワーズワスの思想が大きな影響をもっている。10才の時に、ワーズワスが大自然の中に生命の深い至福の喜びを直感した様を、*The Prelude* (1805 年本) 第二巻 405-434 行に語っている。自然神秘主義的経験の描写のあと、435-6 行で “If this be error, and another faith Find easier access to the pious mind” という。this は、直前に述べた自然崇拜の信仰を指し、another faith (i. g. キリスト教) に対している。ワーズワスにおいても、やがてこの両者の融合、或は妥協の時がくるが (cf. *The Excursion*), “*The Prelude*” や “*Tintern Abbey*” に於いて、大自然に対した際にみせる、あの精神の高まりに通じるものが、キーツの作にみられる。前述の、プーサン作に対するキーツの詩作の跡付けと対比する意味で、やはり造型美術に対するとき、ワーズワスと同様な精神の高揚をキーツがどう表現しているかをみよう。

大英博物館には、エルギン・マーブルズ (*The Elgin Marbles*) と名付けられた、パルテノン神殿の彫塑装飾の大部分を含む、主としてフィディアス派の彫刻群がある。これらの人物群が、アテネから運ばれ、大英博物館に納められるにあたって、キーツの親しい友人セヴァーンの努力が大きかったために、キーツの親しい知人で、画家のヘイドンの努力が大きかったために、彼は早くから、これらの作品群に注目していた。

ON SEEING THE ELGIN MARBLES

My spirit is too weak——mortality
 Weights heavily on me like unwilling sleep,
 And each imagin'd pinnacle and steep
Of godlike hardship, tells me I must die
Like a sick Eagle looking at the sky.
 Yet 'tis a gentle luxury to weep
 That I have not the cloudy winds to keep,
Fresh for the opening of the morning's eye.
Such dim-conceived glories of the brain

Bring round the heart an undescribable feud ;
 So do these wonders a most dizzy pain,
 That mingles Grecian grandeur with the rude
 Wasting of old Time—with a billowy main—
 A sun—a shadow of a magnitude.

NOTES; (1) each imagined pinnacle=pinnacle of poetry. 永遠の美をもつ
 「詩歌・芸術の高塔」のこと。
 (2) the morning's eye=the sun

TO B. R. HAYDON

Haydon! forgive me that I cannot speak
 Definitely on these mighty things;
 Forgive me that I have not Eagle's wings—
 That what I want I know not where to seek:
 And think that I would not be over meek
 In rolling out upfollow'd thunderings,
 Even to the steep of Heliconian springs,
 Were I of ample strength for such a freak—
 Think too, that all those numbers should be thine;
 Whose else? In this who touch thy vesture's hem?
 For when men star'd at what was most divine
 With browless idiotism—o'erwise phlegm—
 Thou hadst behold the Hesperian shine
 Of their star in the East, and gone to worship them.

NOTES; (1) the Elgin Marbles
 (2) Heliconian springs=詩的靈感の泉
 (3) the full Hesperian shine.....
 cf. "It is a flagging imagination which could represent the
 Partheon frieze under the metaphor of the star of Bethle-
 hem." (Amy Lowell, p. 276)

二つのソネットを上順序に掲げたのは、Oxford 版 (Garrod 編) 詩集
 によったのだが、A. Lowell なども、前者を最初に書かれたものと言っ
 ている。(".....which was probably written first." J. Keats, Vol. I. p. 276
 慶大図書館蔵) ただ H. E. Rollins の説によれば、この逆になるのである

が (The Letters of J. K. Vol. pp. 122-123), 私は今のところ如何とも判断出来ない。彫刻の人物群を前にしたとき、その美に酔っている精神状態をよく伝えるものとしては、前者の方がすぐれていると思われる。ヴィンケルマンがギリシャ美術に接した時の態度と、これら二つのソネットを考え併せると、キーツの特徴が殊によく分る。ヴィンケルマンにとって、「形」がもっとも重要であった。フィディアスやプラクシテレスなどの諸作が、彼をもっとも強く引きつけたのは、均整と調和と優雅な線と輪廓美とであって、肉体の美しさこそが第一で、表現技巧の類は二の次であった。それ故、かのギリシャ美術批評においては中心を形象美においたのである。一方キーツが、この偉大な芸術体験の直接的表現である二つのソネットを証言とするならば、ギリシャ彫刻に接した時も、形象美などは、彼に訴えるところは殆んどなかったようである。彫刻の与えた印象は、どうもうまく表現されておらず、一種の混乱さえきたしているが、Thorpeの説では、キーツの頭脳に、一度に多くのイメージが乱れ入り、更に、彼自身が真に芸術作品の名に価する作品の前にあっては、一種の病的な恐怖感を抱き、詩という芸術で成功を納めようという自分の年来の望みが、はてしなく遠いものに思われたのだらうとしている。二つのソネットを十分にエクスピリカシオンしたならば、キーツの心を動かしたのは、単なる大理石像群の外見上の美しさではなく、芸術作品のより深い意味——即ち、それらの与える感情への働きかけとか、それらの生み出す真実味であることが分る。キーツの興奮しきった脳裡を去来したのは、長い年月にわたる人類の進歩のことであり、文明の興亡のことであり、人間とか世界とかというものの意味についての映像であったらう。

Wasting of Old Times——with a billowy main
A sun, a shadow of a magnitude.

という二行では、ほんの一瞬のうちに垣間みた、崇高なる「無限」の姿をほぼ完全といってよい程の筆緻で描いている。これはキーツが、それまで読みなれたポーブ訳から、はじめてチャプマン訳「ホーマー」を読んだ時

に経験した心象と同質のものであった。

Look'd at each other with a wild surmise——

Silent, upon a peak in Darien

(On First Looking Into Chapman's Homer)

Cortez とその部下たちが、太平洋をじっと見下ろしている場面を描写した、この圧するような驚きと畏怖の感は、The Elgin Marbles にキーツが初めて接した時のそれに対応するものといえよう。The Elgin Marbles のソネットは、キーツの中でも、最高の出来とは云えないが、彼の「美」を知る上には非常に大切なものである。大理石像が、鑑賞者の想像力を捉え、その中に、これらを最初に作った芸術家が、最初に把み、こういう像へと作り上げた、「生命」を呼び起こすことの出来る力こそ、鑑賞者にとって、「美」を把握した瞬間であり、形式と内容が一致し、美と真が具現する瞬間なのである。ギリシャの古甕を見て、Beauty is truth——truth beauty と高らかにうたったときも同様であった。鑑賞者の独自の想像力が、この甕に表現された芸術家の想像力と同一の高みに到達したのである。単に甕の外形が整っていただけでは、キーツには何ら美しいものとは感じられなかっただろう。先述のヴィンケルマンとの比較でも分る通り、想像力に富んだキーツの心に火をつけたのは、実にそこにあらわれた象徴であった。この象徴とは、それ自体が精神活動の所産であり、その中には、ダイナミックなものを含み、想像力で捉えた深い洞察のあらわれでもある。これこそ、真の芸術であり、美であり、長い年月に耐える形の中に保たれた真実なのである。キーツは「想像力が美として捉えたものは、真実である。たとえそれが、以前に存在していたものであれなけれ。」(What the Imagination seizes as Beauty must be truth, whether it existed before or not.) という。キーツにとって「美」は、単に詩的生活や詩的真実に対する key であるばかりでなく、真実そのものといってもよい。想像力を通して物を把握する方法は、理論や科学的研究とは対照的に、感情を通じての直感的方法とよぶことが出来る。この場合、精神が想像力を通

して、間接というよりは、むしろ直接的に捉えた精神的実在を「美」とよび、それが同時に「真」でもあった。これは、単に感覚美に限定されるにはほど遠い、およそ感覚的なものの領域とは別世界を扱っているのである。それは、永遠普遍の真実——いわば「理想」を指しているのである。

こういう美は、単に知覚されるにとどまらず、想像力の働きによって創造され得るという考えを、キーツは終生持ちつづけた。彼は、想像力というものは、人間世界との親密な、しかも長い交わりを結ぶことによって、鍛えられ、より高度なものへと育てあげられ得るものだと確信するようになった。教養の裏付けを欠き、ただ感傷的であるにすぎない空想力が、夢の世界に移ってゆく場合と、長い間貯え、人生の叡智を一杯につめこんだ想像力が飛翔するのでは、一見よく似ているが、大きなギャップのあることを見抜いていた。前者は、ひどくセンチメンタルで、現実味を欠く、一種の vision に終るのに対して、後者は高い真実の啓示へと達する。言い換えれば、「美」とは、知的に訓練された想像力——即ち、経験の重みとが、或は判断力とかいったものに耐え抜いた想像力——の直感力を通して到達された真実のことということが出来る。

あ と が き

生来の怠慢さに加え、はじめにも書いた多忙のために、読みかえすも不愉快な仕事となってしまった。そうたびたび「多忙」のせいになると、どこからか「ギマン的」という声がきこえて来そうである。私は、この小論で、不十分ながらキーツと造型美術のかかわり方の二諸相にふれたつもりである。Jack 博士の手によって、はじめて systematic になったこの方面のテーマを、私としても更に研究調査をしてゆきたい。大学で美学美術史学を学び、現在英語教師を衣食の糧としている私に、もっともふさわしい仕事であるように思う。この稿を終えようとしている今日から二日後に、私に絵画と詩の関連を考えさせてくれた、レッスングの「ラオコーン」が、斉藤栄治氏の翻訳で岩波文庫に入ろうとしている。英仏の翻訳を片わりに、レクラムの細かな活字と戦った日々のことがなつかしい。研究テーマ

と周辺学との関連は、研究がすすめばすすむ程、もう一人の手には負えなくなる。共同研究の必要なゆえんである。優れた訳業の出ることも、私は広い意味での共同研究だと思う。先年はキーツの研究に欠くことの出来ない、オヴィディウスの「転身物語」(人文書院)が、田中秀央博士らによって訳出され、更に昨年は熊本大学の諸氏によるスペンサーの「妖精の女王」(文理書院)が出た。一度は頓挫しかけた、私のキーツの勉強も、これらの本の出版で、再び息を吹きかえした。ペンギンの英訳の助けは借りるとしても、私の不十分な語学力では、「転身物語」は、もう気の遠くなるほど、はてしない道程だったから。

(1970. 1. 15)

参 考 文 献

1. W. H. Evert: Aesthetic And Myth In The Poetry Of J. Keats (Princeton U. P. 1965)
2. W. J. Bate: John Keats (Harnvard U. P. 1964)
3. C. D. Thorpe: The Mind Of J. Keats (Russel. 1964)
4. Ian Jack: Keats and the Mirror of Art (Oxford U. P. 1967)
5. J. Benziger: Images of Eternity (South Illinois U. P. 1964.
6. S. Geest: Der Sensualismus bei J. Keats (Breisgan, 1908)
7. Starrick: Die Belesenheit von J. Keats und die Grundzüge Seiner Literarishen Kritik (Mayer & Müller, 1960)
8. 佐藤 清:「キーツの芸術」(研究社)
9. 同 :「キーツ研究」(英詩研究社)
10. 日夏耿之介:「美の司祭」(三省堂)
11. 園 頼三:「美の探求」(創元社)

以 上